

雑草との共生で作物は健康に

徳野 雅仁

記憶に残る植物や小動物との最初の思い出は、ヤツデの花と大きなカタツムリでした。四、五歳の頃ではなかったかと思えます。母親と共に何度か訪れた家の窓際に植えられていたヤツデの不思議な花のかたちに魅せられたのでした。カタツムリとの出会いも同じヤツデの葉上でした。大きな葉の上で行き来する数匹のカタツムリをいつまでも眺めていた思い出は今でも忘れることができません。

その日は雨でしたが、以来、雨の日が好きになり、子どもの頃は縁側で一日中雨を見て過ごしたこともあります。屋根からしたたる雨だれや、植物の葉上で銀色の雨粒が無数にはじけ散る様子に見入っていたものです。

春のタネまきを済ませて一段落する六月。自然菜園は、新しく芽ばえた若い夏草が生長をはじめ、緑一色に包まれます。従来のは生やしてはいけないとされている雑草も、作物と美しく調和し、見事な共生関係をつくり上げています。

六月は梅雨入りの季節で、次第に雨の日が多くなります。雨は植物にとっては恵みの雨ですが、高温多湿のこの時期は反面、作物にとっては病気が発生しやすい季節でもあります。その病害感染経路ともなる雨の日の、作物への土砂のはねかえりを防いでくれるのが雑草で、夏にかけての病虫害予防にも雑草は欠かすことができません。とりわけ、キュウリ、カ

ポチャなどのウリ類への土砂のはねかえりは致命的でもあり、また、サラダナ類やシユンギクなど、生食する野菜は、雑草が周囲にあることによつて汚れない瑞々しい収穫が得られるようになります。

雑草はこのように、作物を守るほか、雨による表土の目づまりを防ぎ、土壌中への酸素の供給を助ける役目も果たしています。また、夏の地温の異常な上昇を防ぎ、土の乾燥から作物の根を守り、天敵の棲み処にもなり、日々、私たちの目の届かないところで野菜を食害する虫を捕食し虫害を防いでくれているのです。作物の葉の裏をのぞいてみると、他の昆虫を捕食する天敵のクモをよく見かけます。葉裏に生みつけられた卵を数日追ってみると、フ化した幼虫のほとんどはいなくなり、生きのびて大きくなった幼虫を見かけると愛しく思えるほどです。

作物を栽培し、土壌環境が変化すると、畑に生える雑草も次第に淘汰され、作物と共生できるものが自然に残ります。エノコログサ、メヒシバはそうして残った夏の畑の代表的な雑草でしょう。そして、雑草はできるだけ抜きとらず、除草するときは、できるだけ根は地中に残して、地際から刈りとり、刈りとった草は作物の株元にねかせます。刈りとりは作物を覆うほど生長したのみ行うだけで十分です。

(イラストレーター イラストも筆者)

